



05

博物俱楽部
書庫の道しるべ

[協力館紹介] 理科ハウス

理科ハウスは、神奈川県逗子市にある世界一小さな科学館です。「家の近くにある」と「自分のレベルに合っている」の両面において身近な科学館を目指し、2008年5月にオープンしました。

一軒家ほどのコンパクトな空間ですが展示の数は膨大で、教科書で学んだ知識を生活での経験とつなげる工夫や仕掛けを日々加えています。単に答え合わせをするのではなく、スタッフとも会話しながら仮説を立て、実験や議論をして探求する過程そのものをお楽しみいただけます。



LiCa·HOUSE
www.licahouse.com

開館時間：13:00～17:00

開館日：土・日・月

夏休みや冬休みは変則的になるためホームページのスケジュールをご確認ください

入館料：大人300円/大学生100円/高校生以下無料

- ・リピーターのためのお得な回数券があります。
- ・団体や貸し切りでもご利用いただけます。

理科ハウスの利用定員は30人です。8人以上の団体利用の場合は必ず事前にご連絡ください。10人以上でご利用の場合、貸し切りができます。追加料金がかかります。

所在地：〒249-0003 神奈川県逗子市池子2-4-8

電話：046-871-6198

Email：mail@licahouse.com

最寄駅：・京浜急行 神武寺駅から徒歩6分

- ・JR逗子駅から徒歩18分あるいは、京浜急行バス30、31、32系統アザリエ団地または笹倉経由に乗り、池子十字路下車 バス停から徒歩1分
- ・JR東逗子駅から徒歩18分

博物俱楽部の最新情報、パスファインダーについては

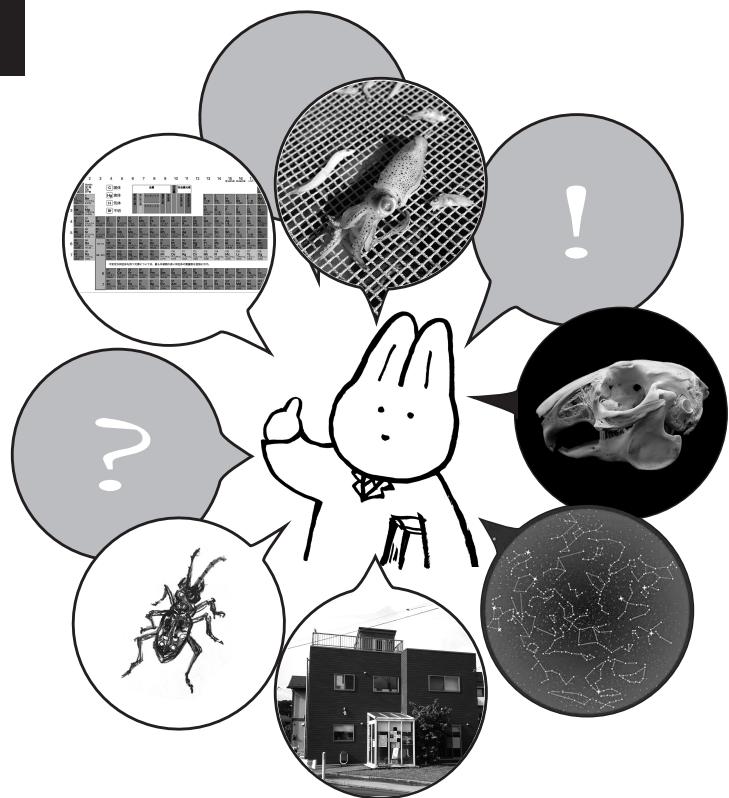
twitter「@Hakubutsu_Club」からお知らせ、また
<http://www.hakubutsuclub.com/>でご覧いただけます。

05

博物館を知る・つくる

ver.2/24.Aug.2025

博物館を知る・ つくる (ver.2)



対象者：博物館を見るだけで終わらせ
たくないおとななどども
博物館を作つてみたい
おとななどども

作成者：TONO

協力：理科ハウス

I. 博物館と生活する

巨大なアパートサウルスの骨格やグソクムシの奇怪な液浸標本、19世紀の顕微鏡にアステカの土器、色鮮やかなタピビトノキの種……科学館や博物館の展示を前にして、想像力と好奇心がかき立てられたら、入り口です。お気に入りの館に通いつめていると、見過ごしていた道端の落ち葉の違いが不意にとても気になるようになります。スーパーや市場に並ぶ魚の顔たちが急に面白く見えてきたり、自然と普段の生活に博物館が入り込んでいます。博物館に樂しくいりびたるヒントとなる本を集めてみました。

キーワード：博物館、科学、自然史、標本、資料、博物館学

II. 博物館で“各駅停車”する

■矢野興一（編・著）、2016、『見る目が変わる博物館の楽しみ方』ペレ出版。

展示された資料を見て、「気になるけどよくわからない」という経験はありませんか？この本は16名の専門家による自然史博物館の裏話集です。博物館ってどんなところ？資料の注目ポイントは？標本はどうやって作るの？博物館のプロのこだわりが紹介されています。これを読めば、素通りしていた展示の前でも足が止まるはず！

■大澤夏美、2021、『ミュージアムグッズのチカラ』国書刊行会。

ショップにも力を入れている博物館が増えています。この本で紹介されているグッズはどれも、単なるお土産ではなく、博物館で見たものや気づいたことを思い出させてくれたり、新たな発見を与えてくれるものです。グッズを通して伝えたいたことや実現したこと、苦労について語ったインタビューを読むと、いつの間にか気になる展示が増えています。

III. 博物館の“中の人”を知る

■斎藤靖二、2016、『博物館のひみつ——保管・展示方法から学芸員の仕事まで——』PHP研究所。

小学生の調べ学習のための本ですが、博物館や学芸員の役割を研究する「博物館学」の入門書としてもおすすめです。イラストや写真、インタビューが豊富で、博物館の仕事について考えたことがなかった人でもきっとイメージしやすいはず。案内所の役割など、専門書でも言及の少ない部分まで網羅されたディープな本もあります（案内者も買

いました）。

■ニコラ・フィリベル（監督）、1994、『動物、動物たち』[絶版]※1

パリの国立自然史博物館のリニューアルの過程を記録したドキュメンタリー映画です。目にする機会の少ない標本の修復や運搬の風景は必見です。どんな展示を作るか・実現できるのかという議論は（生々しく）白熱しています。博物館に関わる人々の息遣いが伝わってくる作品です。

IV. 自宅を博物館にする

■アレクサンドル・エフゲニイエヴィチ・フェルスマン（著）堀秀道（訳）、2005、『石の思い出』草思社。

20世紀ロシアの鉱物学者が、石と歩んだ半生を振り返る随筆です。審美眼に叶う標本を追い求めるコレクターの悲喜こもごもが、詩的な表現でつづられています。蒐集への執念は調査の過酷さや資金難にもくじけず、生々しいです。どんな博物館の資料もそれぞれに歴史を経た上で、目の前に存在することを教えてくれる1冊です。

■盛口満・安田守、2001、『骨の学校——ぼくらの骨格標本のつくり方』木魂社。

15年かけて理科準備室を“骨部屋”に変貌させた学校の先生2人が、骨や骨取り、生徒たちとの思い出をユーモラスにつづったエッセイ集です。標本作成の苦労話や失敗談は、言葉とは裏腹に楽しそう（巻き込まれた周囲の先生や生徒たちは……）。自分でも作ってみたくなったところで、巻末には身近な素材でできる標本づくり入門までついています。

■理科ハウス、2018、『理科ハウス図録』※2

世界で一番小さい科学館「理科ハウス」の公式図録です。オープンからの10年間の常設・企画展示のうち、特に喜ばれたものがまとめられています。訪れるたびに変わる多様な展示の写真や解説はもちろん、展示の意図や来館者と交わされた会話も盛り込んでいます。おうちを科学館にしてみませんか？

※1 現在DVD等の入手は難しいですが、国立国会図書館で視聴できるほか、TSUTAYA DISCASでもレンタル可能です。

※2 本書は理科ハウスから紹介いただきました。同館に来訪して入手できるほか、オンラインショップでも購入可能です。